

人と関わる力の発達における乳幼児期の重要性

人間の子どもは生まれ落ちたその瞬間から、誰かに抱き上げられ、守ってもらわなければ生きていけない存在です。馬の赤ちゃんは生まれてすぐに立ち上がり、母馬のところへ自分で行くことができます。猿の赤ちゃんはその強い握力でお母さんの体毛をしっかりつかんで、離れずにいられます。その点、人間の赤ちゃんは非常に未熟な状態で生まれる「子宮外胎児」とも呼ばれます。また、そのことは人間が生まれたそのときから、人との関わりを必要とする「社会的動物」であることを示しています。乳幼児期はまさに、人と関わることで生きていく「自分」をつくり上げていく重要な時期です。子どもにとって1番身近な「自分を守り愛してくれる大人との関係」を基盤として、人との関わりを拡げていきます。その経験の中で、自信を付け、「自分」という人格が確立します。幼児教育において重要視される「主体性」「自立心」も子どもを取り巻く人間関係から育ちが始まります。乳幼児期に望ましい「人と関わる体験」ができるよう、保育においてはその点が大変重要な課題になってきます。

1 生きていくために必要な人と関わる力～基本的信頼感の獲得～

赤ちゃんは、大人を引き付ける力をもって生まれてきます。多くの大人が赤ちゃんを「かわいい!」と思い、笑顔を向けずにはられません。抱き上げてあやしたくなってしまうのです。赤ちゃんが笑ってくれるとますますうれしくなって、もっと関わりたくなります。赤ちゃんが泣けばなぜ泣いているのかを考えて、ミルクを飲ませてみたりおむつを替えてみたりします。まだ言葉では伝えられない赤ちゃんの要求に答えようと様々に行動します。その結果、赤ちゃんは周囲にサインを自分から出せば、不快な状況が心地よく快適な状況に変わることを体験して、自分の周囲には自分を愛し守ってくれる存在があり、安心して過ごせる環境があるのだと学習します。それが「基本的信頼感」につながります。この基本的な信頼感赤ちゃんの人格を形づくる大切なものとなり、これからの人生を左右する人と関わる力の基礎となっていきます。

子どもの主な育ちの場の多くは家庭です。家族との関わりが子どもの成長に大きく影響します。家庭以外のところで育つ場合でも、家族同様に関わる大人が必要です。現在乳児期から保育所やこども園で長時間を過ごす子どもが増えています。保育者の役割はとてつもなく重要なものとなります。乳児期から幼児期にどのように人と関わってきたか、確実な愛着関係を大人と形成できたか、人との関わりを心地よいものとして認識できたかが、子どもがこれから築く人間関係に大

切なこととなるのです。

① 乳児期に必要な保育～確実な愛着関係の獲得～（0～1歳児）

保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、乳児期の子どもの保育の内容として3つの視点を挙げています。そのうち、人間関係と大きく関連するのは「社会的発達に関する視点」でしょう。「身近な人と気持ちを通じ合う」ことから、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培うことが重要視されています。望ましい体験として（保育のねらい）、以下3点が挙げられています。

- ①安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。
- ②体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。
- ③身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。

こうした子どもの姿を目指すためには、保育における大切なポイントがあります。

■ 応答的な関わり（子どもの出すサインに的確に答える）が最も重要なこと

子どもは不快な状況、例えば空腹などがあるときには泣いてそれを表現します。そのサインを見逃すことなく、タイミングよく対応すること、それが「応答的な関わり」です。空腹であれば授乳され、不快な状況が快適な状況に変わるという体験を経て、「サインを出せば不快な状況が変わる」ことを学習していきます。つまり、サインを出そうとする姿勢が促されることになります。それは、自分の要求を表現しようとする「意欲」につながります。同時にそのサインを受け取って対応してくれる身近な大人を認識し、信頼し、そのことで安心して生活ができるようになるのです。反対にタイミングがずれたり、子どものサインに気付かないまましていると子どもはサインを出さなくなり、人との関わりを喜ぶことにはつながらなくなってしまいます。

■ 保育者が確実な愛着対象とされることが情緒の安定につながる～養護のねらいの達成～

乳児期の保育においては、最も身近な愛着対象を子どもが獲得することが最優先の課題です。そのためには、多くの保育者が代わる代わる保育を行うことよりも、できるだけ同じ保育者（担当者）が対応することが有効です。長時間の保育には、よりその保育方法が求められることになります。なるべく早い段階で、子どもが愛着対象を獲得し、安定した生活が送れるようにすることが大事です。不快な状況を快適にする、つまり「生命の保持」、そしていつも同じように対応してくれる保育者を認識して要求を表現する、それは「情緒の安定」につながります。この時期の養護のねらいが確実に達成されることになるのです。

■表情や言葉でしっかりと対応する～言語の発達、人との関わり方を学ぶ体験になる～

また言葉は出なくても、表情や全身の動きで一生懸命に思いや要求を伝えようと表現している子どもたちに、保育者はしっかりと応えていく必要があります。大事なのは表情や言葉(語り掛け)です。温かな雰囲気の中で、自分を肯定してくれる空気を子どもは感じ取ります。「人と関わることの快適さ」「受け止めてもらう心地よさ」を十分に感じながら、自分をさらに表現しようとしていきます。子どもが感じているであろう思いや要求を笑顔で受け止め、そして言葉でしっかりと代弁すること、分かったよと受け止めたことを伝えることが大事です。その毎日の繰り返しで、言葉は自分の要求を表現することや人と関わる上で便利なものと子どもが認識することで言語の発達につながります。

8、9か月頃には「指さし」が現れ、他者と思いを共有しようとする行動が見られるようになります。そうした行動には笑顔で共感する、「～だね」「そうだね」など言葉で共有できたことを伝えることが大事になります。共感してもらえた体験は、さらに人と関わろうとする意欲、自分を表現しようとする意欲に大きくつながっていきます。

②乳児期から幼児期の保育～依存と自立の狭間で関わりを深める～(2～3歳児)

信頼できる保育者との関係を基盤に、周囲の保育者や子どもたちとの関係にも関心が向いていきます。2歳を過ぎる頃、「大人と子どもがいること」「自分は子ども」、周囲にいるのは「自分と同じ子ども」というように徐々に認識されてくるようになります。他児のしていることにも大いに関心があり、同じ遊びをしようとしていたり、同じものが欲しくなったりします。様々な要求のぶつかり合いがトラブルになりますが、保育者に仲立ちされながら、自分と同じ子どもでも「思いの違う他者」の存在を意識するようになります。そうした体験を積み重ねながら、「みんなと一緒に楽しい」ことを学習し、他児と共に過ごす生活が楽しくなることが重要になります。しかしながら、みんなで楽しく生活するには、自分の思いや要求を抑えることも必要だ、ということに気付くようになってきます。そこで、生活上のルールの必要感を感じる体験が必要なのです。

保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、以下3点が領域「人間関係」における保育のねらいとされています。

- ①保育所(幼保連携型認定こども園)での生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる。
- ②周囲の子ども等への興味や関心が高まり、関わりをもとうとする。
- ③保育所(幼保連携型認定こども園)の生活の仕方に慣れ、きまりの大切さに気付く。

この年齢でも、このような子どもの姿を目指すためには、保育における大切なポイントがあります。

■甘えや葛藤を受け止めながらも自立へ向けての意欲や期待がもてるようにする

保育者とのしっかりとした信頼関係がこの時期でも重要です。自分でやりたいけれどもうまくできないことへのいらだち、自分の思い通りにはならない悲しい気持ちを感じるとき、その気持ちを受け止めてくれる保育者の存在が気持ちを切り替えるためにも大切になります。気持ちを受け止めてもらって立ち直る体験を積み重ねて、自分自身で切り替えができるようになってくるものです。

また、「自分でできた!」という体験、満足感や達成感が子どもを成長させます。できたことを評価するのではなく、自分でやろうとした姿勢を認めることが大事です。自分でやろうと頑張ったことが評価されることは、子どもの自立心を育てることもつながります。子どもは自分が大きくなっていくことを実感できることがうれしく、それを周囲が喜んでくれることが何より大きな喜びとなります。

■遊びや生活の中で様々な子ども同士が関わり、様々な感情体験をしながら関わりが深まっていくようにする

他児の遊びなどの様子にも関心が高まってきます。まずは一緒に遊ばせようとするのではなく、より関心がもてるように気付かせていくことが必要です。「～ちゃん、～してるね」「面白そうだね」など、様子を見ながら声を掛けていきましょう。発達状況も様々なので、まだひとり遊びが大切な時期の子どもには無理をせず、様子を見ながら声を掛けていくとよいでしょう。まずは「同じことをすることが楽しい」「一緒にいることが楽しい」と思えることが大事です。

しかし、関わりが増えればトラブルも起きてきます。このトラブルも実に大切な体験です。トラブルを避けようとするのではなく、安全には十分注意しながら保育者が双方の子どもの気持ちを代弁する、伝える仲立ちをしていくことが必要です。「～ちゃんはこれが欲しかったんだね」と気持ちを受け止める、「でも～ちゃんも使いたかったんだって」と相手の気持ちを分かりやすく伝える、「貸してって言うてみようか」と次の行動を伝える、というように仲立ちをしていきます。その援助によって、「子どもが相手にも思いがあることを理解する」「自分の思いもあるが少し我慢しようかな」という気持ちが生まれる、「どう行動すればよいのかが分かる」など、望ましい体験につながっていきます。欲しい気持ちが通らないいらだちや取られた、という悲しい感情を経験するものの、貸してもらえたうれしさや「ありがとう」を言われたうれしさは、子ども同士の関わりをさらに深めていくこととなります。

CONTENTS

まえがき	001
はじめに 知っておきたい「人と関わる力を育てる」保育に関する基礎・基本	002
1 幼児教育の基本	002
2 幼児教育において育みたい資質・能力	003
3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	004
人と関わる力の発達における乳幼児期の重要性	007
1 生きていくために必要な人と関わる力 ～基本的信頼感の獲得～	007
2 家庭との連携 ～子どもの最善の利益のための保護者・家庭支援～	013

第1章 よくあるギモン 30

Q 1 愛着関係を育むには?	020
Q 2 気持ちを通わせるとは?	022
Q 3 担当ではない保育者になつているのですが…	024
Q 4 かみつきへの対応は?	026
Q 5 いざこざへの対応は?	028
Q 6 人との関わりを深めるとは?	030
Q 7 友達とあそぼうとしないのですが、どうしたらよいですか?	032
Q 8 自己肯定感を育むには?	034
Q 9 仲間外れなどへの対応は?	036
Q10 友達関係が固定化されている場合の対処は?	038
Q11 当番活動を嫌がる子への対応は?	040
Q12 自分のことばかり主張する子へどんな対応をすればいい?	042
Q13 思いやりを育てるには何が大事でしょうか?	044

Q14	善悪の判断をできるようになるためには？	046
Q15	クラス運営で大切なことは？	048
Q16	きまりの大切さを感じられるようにするには？	050
Q17	協同性はどのように育むとよいのでしょうか？	052
Q18	障害のある子どもと共に生活する上で大切なことは？	054
Q19	外国にルーツのある子どもへの支援は？	056
Q20	小学生とどのように関わる？	058
Q21	社会とどのように関わる？	060
Q22	保護者と共に育てるためには？	062
Q23	順番やあそびのルールを守るようになるには？	064
Q24	けんかへの対応は？	066
Q25	人との関わりを育むために子どもに掛ける言葉で大切なことは？	068
Q26	家庭における子どもとの触れ合いの大切さを伝えるためには？	070
Q27	帰りの会で伝え合うには？	072
Q28	共同のものを大切にし、みんなで使うには？	074
Q29	自立心の必要性とは？	076
Q30	自立心を育むには？	078

{column} 保育を通してつながりを①

保護者に伝える	080
---------	-----

第2章

「豊かな人間関係をつくる」アイデア 20

- | | | | |
|----------------------|-----|-------------------------|-----|
| 1 あやしあそび 0歳～ | 082 | 11 ○時にみんなで集まろう 5、6歳頃～ | 102 |
| 2好きなものに関わりながら人と出会う | | | |
| 0～2歳 | 084 | 12 おいかけっこなど 1、2歳頃～ | 104 |
| 3 伝承あそびから「あぶくたつた」 | | 13 ジャンケン鬼ごっこ 5、6歳頃～ | 106 |
| 2、3歳頃～ | 086 | 14 異年齢児との触れ合い 3～5歳 | 108 |
| 4 人をつなぐ「もの」 2～4歳頃 | 088 | 15 交流活動「一緒にあそぼう」 5、6歳頃～ | 110 |
| 5 友達との関わりを広げる 3、4歳頃～ | 090 | 16 地域の方とともに 5歳頃～ | 112 |
| 6 発表会ごっこ 3歳頃～ | 092 | 17 お家の人とプレイデー 4、5歳児 | 114 |
| 7 ビー玉ころがしあそび 5、6歳頃～ | 094 | 18 当番活動：当番予約表 5、6歳頃～ | 116 |
| 8 紙コップピラミッド 5、6歳頃～ | 096 | 19 お話ごっこ 4～6歳頃～ | 118 |
| 9 ドールハウスづくり 5、6歳頃～ | 098 | 20 平面玉入れ 3歳頃～ | 120 |
| 10 オオカミさん 3、4歳頃～ | 100 | | |

{column} 保育を通してつながりを②

- | | |
|------|-----|
| 共に育つ | 122 |
|------|-----|

第3章

「継続期で「人と関わる力を育てる」

- | | |
|-----------------------------|-----|
| 1 幼児教育と小学校教育の接続の必要性と基本的な考え方 | 124 |
| 2 継続期に育む人との関わり | 126 |
| 3 幼小連携を通して大人もつながる | 130 |
| 4 小学校生活で育まれる人との関わり | 132 |

- | | |
|-----------|-----|
| 編著者・執筆者紹介 | 136 |
|-----------|-----|

1

愛着関係を育むには？

園で愛着関係を育むには、どのようにするとよいのでしょうか？

【 1歳頃 】

保育者

ずっと泣いているなあ、どうしたら心を開いてくれるかな？

なぜだろう？

保育者のギモン

4月当初、泣き声が響き渡る保育室です。大きな声で泣く子や不安そうな顔で周りを見ている子もいます。担当者として早く子どもたちと信頼関係をつくりたいのですが、どうしたらよいのでしょうか？

お答えします！

解決の糸口

生活の急変で不安がいっぱいの子どもたち、少しずつ自分の興味あることに目が向くようになっていきます。子どもの様子をよく観察して、好きなあそびを共有しながら、大丈夫だよ、と伝えながら、園は楽しいところだと思えるようにあそびの環境や教材を工夫しましょう。生活介助はできる限り担当者が行い、あそびでは他の保育者や子どもたちと関わり合えるようにしていきます。



保育者

Aちゃん、〇〇好きかな～
先生と一緒に見ようね



ANSWER

4月当初は家庭のリズムに合わせてながら、ゆったりと生活できるようにしましょう。また子どもが助けてほしいサインを見逃さずに言葉で返ししながらスキンシップを取り、安心感をもてるようにします。

4月はまだ家庭から来た子どもの様子が落ち着かないものです。一人ひとりのリズムに合わせて生活していくのは大変ですが、集団で一斉にやろうとすると子どもを待たせることになったり、急がせたりしてしまいます。まずは担当者との関係をつくることを優先させて生活の流れや保育者の動きを工夫してください。

ING

担当者(なるべく同じ保育者)がいなくても安定して過ごせるように

担当者との関係がしっかりできていると、時々担当者がいなくなっても安定して過ごせるものですが、いないときには誰が生活介助を行うのか、保育者間で相談して決めておくといよいでしょう。1番がいなくても、2番3番の保育者で安定した生活ができるということが重要です。

保護者と子どもの様子など話題を共有し、親しくなること

不安なのは子どもだけではありません。保護者も同様に心配しているものです。こちらから積極的に声を掛けていきましょう。保護者ともしっかり信頼関係ができると、子どもも安心するようで、保育者との関係も変わってくる可能性があります。子ども同様に保護者との関係も深められるように心掛けましょう。

POINT

けんかへの対応は？

けんかの際、なかなか仲直りができません。どんな対応が解決へとつながるのでしょうか？

【3歳以上】

子ども

B君なんか大嫌い！



なぜだろう？

保育者のギモン

物（場所）の取り合いや思い通りにならないことですぐにかっとなり、きつい言葉を投げ掛けたり、手が出てしまいます。話を聞いてもすぐに謝ることができません。どう支援したらよいでしょう？

お答えします！

解決の糸口

まずは保育者が間に入り、子どもが落ち着くのを待ちましょう。双方の気持ちを丁寧に聞き、お互いの気持ちを伝え合うことで、子ども自身が考えられるようにしましょう。

ANSWER

保育者

どうしたの？ どうしたかったの？



子ども

順番で使ったらいいんじゃない？
こっちにもう1個あるよ！

子どもが興奮したり、泣いているときにはまずは保育者が間に入り、膝に座らせたり、背中や肩に手を添え、話を聞くようにします。双方の気持ちを分かりやすい言葉で伝えながら、状況を整理していきましょう。また、周囲の子どもたちの意見を聞くことは、いろいろな考えに触れるよい機会になります。

「ごめんなさい」と言うことが解決ではありません。

NG

「ごめんなさい」=仲直り？

様々な原因で起こるけんかですが、双方強い思いがあって納得できなかったり、素直に謝ることができない子もいます。「ごめんなさい」は気持ちとつながって初めて意味のある言葉になります。解決を急がず、時間がたってからでも「さっきはごめんね」と言い合える姿を大切にしましょう。

友達の姿から考える

成長と共に友達のけんかを止めたり、間に入って話を聞いたりする子が出てきます。自分のけんかときには素直になれない子も、友達のけんかの姿を見たときにどうしたらいいかを考えるきっかけになります。周囲の子をうまく巻き込みながら、仲直りへとつなげていきましょう。

POINT